

## 実践活動記録

### 1 はじめに

校区は氷見市街より西方4kmに位置する自然豊かな地域で、周囲には田園が広がり、歴史や伝統文化にも恵まれている。7地区から成り立つ校区の全世帯数約800戸のうち、半数以上は農業に従事する兼業農家である。児童宅については、共働きの家庭が多い。保護者や地域住民の教育への関心が高く、学校に協力的である。

児童は学年の枠を超えて仲がよく、素直で伸び伸びと活動するが、課題解決に向けて取り組む力や忍耐力等は、まだ十分に培われているとはいえない。縦割り班の活動や地域への奉仕活動等を積極的に取り入れ、個々の努力や他との関わりのよさを認めながら最後まで粘り強くやり遂げようとする心を育むようにしている。

児童は、地域の専門家の協力を得て、りんご栽培、菊作り、稲作等、地域の特色ある産業等について体験を通して学ぶ機会に恵まれ、ふるさとのよさを感じている。

自分の住む地域の自然や産業、それらを支える人々と繰り返し関わり、自然の恵みや人々の素晴らしさに触れる活動を計画的に位置付けた。そのことで思いやりの心をもって共に支え合い、ふるさとへの愛着を深めることができるように地域での体験活動に取り組んだ。

### 2 活動の実際

#### (1) いろいろな関わりの中で学ぶ全校での米作り活動

全校での米作り活動は26年間継続している。地域の自然や人との関わりを通して、地域のよさを知り、郷土を大切にしようとする気持ちを高めることをねらっている。今年度は、5年生を中心に全校縦割りグループで取り組んでいる。下の表のように学年に応じて総合的な学習の時間や教科、特別活動等と関連付け、1年間を見通して体験的な活動を行っている。

<教育課程の中での米作り活動の位置付け>

学年	5月 田植え	7月8月9月 かかし作り	10月 稲刈り・脱穀	11月 もちつき
1年	特別活動	特別活動	特別活動	特別活動
2年				
3年				
4年				
5年	総合	総合	稲刈り：特別活動 脱穀：総合	総合・特別活動
6年	特別活動		特別活動	総合

#### ① 田植え（5月9日）

田植えは米作りの中で大切な作業である。苗を植える作業から様々な作業が続き、収穫の喜びへとつながっていく。田植えの作業は不安定な土の上で行い、不慣れな子供にとっては不安なものである。また、確実に苗を植えないとうまく育たない。子供が、楽しかったと感じ、米作りへの意欲をもてるように発達段階に応じた手立てを講じる必要がある。そこで、縦割りグループでの活動とすることで、上級生が下級生を助けるようにするとともに、保護者や地域の方に力を借りて活動が進むようにした。

子供の祖父母、保護者及び育友会役員の方に指導を受けながら縦割り7班に分かれて学校田に苗を植えた。

田植えの前に5年生が田植えについて全校に発表した。全校の子供たちは田植えから収穫までの米作りの活動と稲の成長の様子を想像することができた。また、今年で29回目の学校田での田植えであることを知り、米作り活動の伝統を感じ、活動意欲を高めることができた。



〈地域の方の指導を受けながらの田植え〉

1年生は慣れない田の土の感触や田植えの難しさ等を体感した。実際に田に入り、苗を植えたことによって地域に受け継がれている産業である米作りの共同作業を必要とする農作業の大変さや工夫を実感することができた。

## ② かかし作り（7月18日、25日、9月15日）

学校田の下草取り、追肥等様々な夏の暑い時期の作業を地域の方がしてくださっている。子供たちは直接米の世話をすることはないため、米への関心が薄れがちになる。そこで、自分たちでかかしを作って学校田に立てる作業を通して、米の成長や米作りの作業に関心をもつことができるようにした。



〈米作りへの関心を継続させたかかし作り〉

かかしは、教師の指導の下に5・6年男子が近くの竹林から竹を切り出した。長さを調整しながら2本の竹を組み合わせて固定しかかしの骨組みを作った。一方、縦割り班で協力して考えたかかしのデザインを基に、5・6年女子が布やわら等を準備しかかしの体を作った。子供たちは、自分たちで作業をすることを通して大きなかかしを作る難しさを味わうとともに、友達と協力して作ったことで主体的に関わり合って活動する楽しさを味わうことができた。

5・6年生がかかしの骨組みを作った後、全校児童が縦割りグループ7班に分かれ、思い思いの絵や文字をかいたり、光るCDや音の出るアルミ缶等の飾りを付けたりしかかしを完成させた。子供たちは、みんなで協力して作ったかかしを見ながら、たくさんの米が実るよう願っていた。また、地域の方々や隣接の保育園の園児もかかしの設置を楽しみにしており、地域のよい伝統になっている。



### ③ 稲刈り（10月2日）

稲刈りは、収穫の喜びと米作りの作業の大変さを体感する絶好の機会である。稲刈りの作業を安全に行うために子供の発達段階に応じた支援を行う必要がある。子供たちが安全にかつ充実感を味わえるように、田植えと同様に地域の方や育友会役員の方の協力を仰いだ。

稲を収穫した喜びをより大きく感じるとともに、手作業による収穫作業の大変さを感じさせたいと考え、育友会役員の方や地域の方に協力を依頼して刈った稲を掛けるはさを作った。はさを作った経験のない育友会役員も多数おり、大人も伝統的な米作りの作業を知るよい機会となった。

保護者や祖父母、育友会役員から鎌の使い方、稲の刈り方しぼり方、はさ掛けの仕方について指導を受

けた。学年ごとに刈って縛る、運ぶ、はさにかけるなどの役割を分担して実施した。

子供たちは、刈り取った稲のにおいや肌触り、作業の大変さと収穫の喜びを感じることができた。稲の刈りとりからはさに掛けるまでの作業を通して収穫後の作業の大変さを体験した。作業の終盤で、自主的に落ちてくる稲穂を集める姿からも、米の大切さを実感したことがうかがえる。



〈米作りの大変さと収穫の喜びを味わった稲刈り〉



### ④ もちつき（11月17日）

米作りの活動を振り返るとともに、米作りを通してお世話になった方を招待してともに収穫の喜びを味わう機会となるようにもちつき集会を行った。

育友会の役員、有志の保護者や祖父母、地区の健康づくりボランティア等40名以上の方の協力と指導の下、収穫したもち米を臼と杵でつき、もちにした。全員で収穫を喜び合い、会食した。また、5年生が今まで米づくり等でお世話になった方々へ感謝の気持ちを込めて米作りについて調べたことを発表した。学校での活動を保護者に知ってもらいたいという思いから、もちつき集会への参加者を広く募るようになったが、協力者が年々増えている。低学年の子供が自分で餅をつけるように手を添えたり、他の家庭の子供に温か



〈地域の方と収穫の喜びを味わったもちつき〉



く声をかけたりするなど地域の子供を地域で育てようという雰囲気の中、一体感に包まれながらもちつきが行われた。子供たちは、集会を振り返り協力して下さった方に感謝するとともに、地域の大人と共に楽しい時間を過ごした充実感を味わっていた。何人もの保護者から、「こんなに楽しいとは思わなかった、また来年も来ます」という声が聞かれた。地域全体で地域の子供を育てるといふ大人の意識と、お世話になった方々に感謝し、地域への愛着を深めた子供たちの気持ちがもちつき集会の雰囲気を一層温かいものにした。

## (2) 専門家の指導から学ぶ菊作り

4年生が菊の栽培を通して、生命の力強さを感じるとともに開花を通して成就感を味わうことをねらって活動した。菊の栽培は専門的な知識が必要で、子供だけでは難しい。地区在住の水見市菊花協会会長に指導を受けながら菊を栽培した。

### ① オリエンテーション（6月14日）

1年間の作業や菊の生育の様子について指導を受けた。菊の種類や菊の育ち方等について説明を受けた後、自分が世話をしたい品種の菊を3種類選んだ。子供たちは、菊作りへの自分なりの見通しと意欲をもつことができた。

### ② 挿し芽（6月23日）

芽を育苗ポットに挿し、根を出させ、芽から苗にする作業について指導を受け、4年生全員が挿し芽を行った。子供たちは、挿し芽から根が出て育つことに驚きながらも、慎重に苗をポットに挿していった。講師の方の「命のバトン」という言葉が子供の心に残ったようだ。



〈命を引き継ぐ挿し芽作業〉

### ③ 定植（7月20日）

苗を鉢に植え替えた。福助作りの方法について教えていただき、どのような花が咲くのだろうと今後の成長を楽しみにした。つるつとした面だった挿し芽から出てきた根を見て、生命の不思議さを感じるとともにその様子に感動し、菊を育てることに意欲をもった。

そして、肥料や水のやり方等、夏休み中の世話の仕方について指導を受けた。ここまで、交代で世話を続けてきた菊を生育状態がよいとほめていただき活動への意欲を新たにするとともに、きれいな花を咲かせたいという願いを強くした。夏休み中の管理が大切であると考え、水やり当番を決め、すずしくなり始め菊が水を吸う午後4時に欠かさずに世話をした。

### ④ 盛り土（8月3日）

根の張り具合を確かめるとともに、肥料や土を追加した。害虫に対して注意が必要であるとの指導を受けた後は、毎日葉の裏や茎を注意深く観察していた。日照時間と開花の時期が密接にかかわっているという説明を聞き、生育が均一になるように定期的に鉢を回転させる必要を

感じていた。

⑤ 輪台付け・止肥（9月21日、10月20日）

つぼみを付けた菊に輪代を付ける作業を行った。一つ一つ大きさの異なるつぼみを大切に扱いつつ丁寧に取り付けて行った。しばらくして花が開いてきた菊に水苔を置くとともに、花の生育を調整するための肥料のやり方について学び、肥料の配分を工夫して水やりを行った。開花した菊は氷見市の菊花展に出品し、奨励賞を受賞した。

⑥ 一人暮らしの高齢者宅訪問（11月9日、10日）

地区の民生委員の方に付き添っていただいて、地区の一人暮らし高齢者のお宅を訪問し、手紙とともに菊の鉢をプレゼントした。長い期間丹精込めて育てた菊をプレゼントした際に喜んでいただいたことから、人に喜んでもらう喜びを味わうことができた。中には訪問後、道で会ったときに挨拶をするようになったなど、地域とのかかわりが深まった姿が見られた。



〈菊を通してのふれ合い〉

⑦ 振り返り（11月中旬）

菊の栽培の最後には、栽培について教えてくださった講師の方に感謝の手紙を書いた。子供たちは、次のように手紙を書き活動を振り返った。

子供の手紙より

～前略～

菊作りを教えていただき、本当にありがとうございました。ぼくは穴倉さんから教えていただいたことが始めは難しく思いました。でも、穴倉さんが優しく分かりやすいように教えてくださったおかげできれいな花を咲かせることができました。全部穴倉さんのおかげだと思います。お年寄りの家へ菊を持って行った時はとても喜んでもらえました。喜んでもらえてとっても嬉しかったです。一生懸命育ててよかったなと思いました。

～後略～

～前略～

菊をお年寄りに渡したらみなさん喜んでくださいました。その時、一生懸命やってよかったなと思いました。でも、一番思ったのは穴倉さんがぼくたちの知らないところで薬をかけたり肥料をあげたりしてくださったおかげできれいな花が咲いたのだと思います。ありがとうございました。

講師の方への手紙を書く機会を設けたことで、高齢者の方に喜んでいただいたことや一生懸命に世話をしたことを価値のあることとして思い返し、講師のおかげで有意義な活動をする事ができたと感謝することができた。実際に手紙に書いて手渡したことで、手紙の内容は心に強く残っただろう。その後、講師の方が来校された際には、進んで挨拶し嬉しそうにする姿が見られた。

### (3) りんごの栽培

上庄小学校の校庭には地域のりんご栽培農家の方の協力を得て植えたりんごの木が3本ある。子供たちが、りんごの観察や収穫を通して、りんごの栽培に携わっている方の思いや工夫を知り感謝するとともに、食べ物に感謝する気持ちをもつことを願って3年生児童が総合的な学習の時間に活動した。

#### ① りんご摘果作業

地域のりんご農家の方から育て方について指導を受けた後、校庭のりんごの小さな実を除去する摘果作業を行った。講師の方の作業についての説明は子供たちにとって新鮮なもので真剣に聞く姿が見られた。りんごの木の下草をとらなくてよいことや摘果作業を行うことによって実が美味しく大きくなることを知り、作業の工夫や活動の見通しをもつことができた。摘果に際しては、子供の背丈よりも高いところに実がなっていたり、枝が入り組んで伸びたりしていたため、作業の大変さを実感することができた。摘果を終えて、子供たちは「これで大きな実になるといい」等と話し、りんごの成長に心を寄せている様子が見られた。

#### ② りんご収穫

9月29日には、校庭のりんご「紅玉」の実の摘み取りを行った。子供たちは、赤く色づき大きくなったりんごを両手いっぱいに取り、予想以上にたくさんとれたことに驚いた。収穫したりんごは、3年生が切り分けて全校のクラスに配って、全校児童で食べた。りんごを配ったクラスで喜んでもらったことに、成就感を味わっているようであった。



<専門家の指導のもと喜びの収穫を迎える>

10月3日には、「こうたろう」の収穫を行った。これまでりんごの種類について認識していなかったが、りんごの種類によって手触りや味が異なることに驚き、りんごに対する関心を深めたようだった。

10月27日には、赤く実った「ふじ」の収穫をりんご栽培の指導をしてくださった方を招いて行った。たくさん実ったりんごを収穫しようと脚立を使ったり、両手いっぱいりんごを抱えたりするなど、生き生きと活動しながら収穫の喜びを味わった。

### 3 成果と課題

#### ○ 成果

- ・ 地域の特色ある栽培活動に長期にわたり携わる体験活動を通して、生命の力強さや収穫の喜びを感じることができた。
- ・ 地域の特色を生かした教材を教材化し、地域の教育力を生かした指導体制をとることで、子供たちは体験を通して地域のすばらしさを感じ、地域に愛着をもつことができた。活動の振り返りの場を設け、講師に対して感謝の手紙を書いたことで、講師に対する感謝の気持ちを持ち、講師の考え方や生き方について考えることができた。
- ・ 全校で計画的に地域の教材や人と触れ合う活動を展開することで、地域に愛着をもち進んで地域の人と関わろうとする心情を育てることができた。
- ・ 地域の教育力を活用することで、学校だけでは体験できないダイナミックな活動を展開することができ、子供たちが感動する体験ができた。

#### ・ 課題

- ・ 学校教育目標の実現へ向けて地域の素材を教材化し、地域の教育力を活用している。年度当初には、子供の実態に応じて活動のねらいを明確にし、外部講師等とも共有する必要がある。その際、打ち合わせの内容を精選し、時間的に負担が増えないように配慮する必要がある。